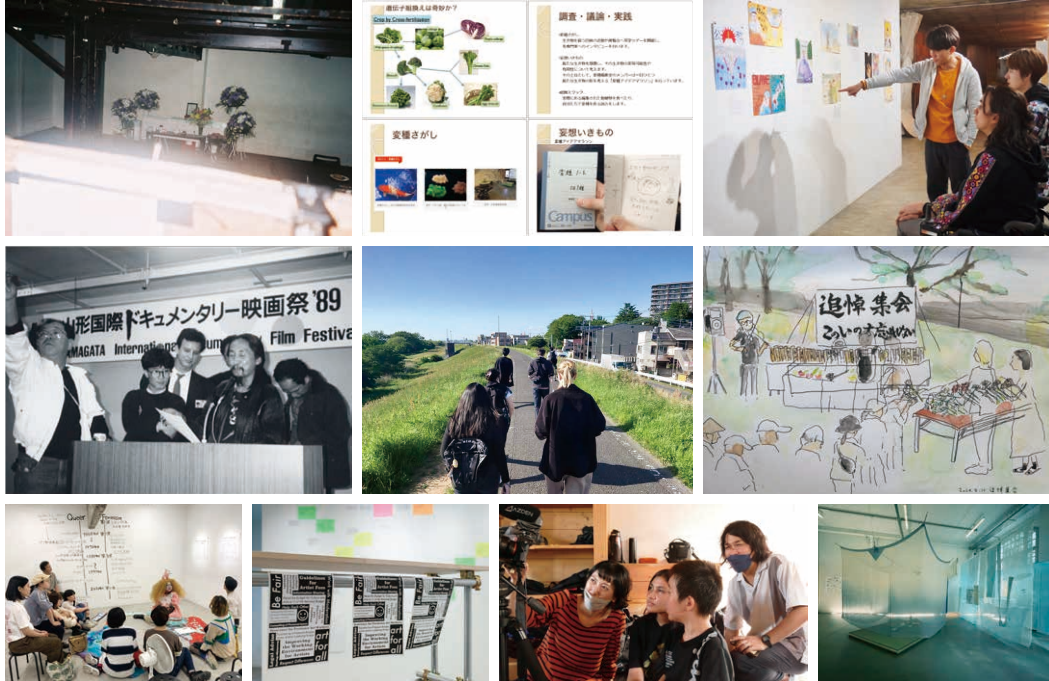




## 一般財団法人川村文化芸術振興財団 2025年度 ソーシャリー・エンゲイジド・アート支援助成決定！



### 2025年度助成対象プロジェクト (全10件のプロジェクト)

助成額：30万円～70万円／件 総額：440万円

- ① 石毛健太+楊いくみ 「ニューセレモニー 一団地から考える生と死」
  - ② 変種編集室 「変種編集室」
  - ③ Prison Arts Connections 「刑務所アート展～壁を超える対話とコラボレーションの創出」
  - ④ ドキュメンタリー・ドリームセンター 「予想もつかない何かと出逢える自由と不安と幸福感 35年前の映像との対話」
  - ⑤ 特定非営利活動法BARD 「102年前の声を共に聴く：松戸朝鮮人虐殺の記憶とこれからの未来(仮称)」
  - ⑥ 友清ちさと 「ホームレス状態の方とその支援・ケアについての協働、対話プロジェクト」
  - ⑦ Moche Le Cendrillon 「Queer Art Event『貝殻をあつめる、道路に線をのこす』」
  - ⑧ art for all 「art for all 社会連携プロジェクト」
  - ⑨ Knots for the Arts 「Knots for the Artsワークショップ in サンタナ学園」
  - ⑩ あべさやか 「Traveling Tea House プロジェクト」
- (順不同)

一般財団法人川村文化芸術振興財団(理事長 川村喜久)では、ソーシャリー・エンゲイジド・アートに対する支援助成事業を2017年に開始し、今回2025年度は8回目の公募と審査を行いました。

2025年度は、昨今の時代の中で多種多様な社会課題の意識が高まり、ソーシャリー・エンゲイジド・アートを通じて「戦争や平和に対するテーマ」、「国境や移民に注目するテーマ」、「コミュニティのあり方に関するテーマ」などを取り上げるプロジェクトが日本国内外から54件(海外3件、国内51件)の応募がありました。今回選ばれたプロジェクトは、このような現代社会に目を向けテーマ設定された10件の多様なプロジェクトが応募の中から採択され、2025年度に発表していただきます。

コミュニティや社会にコミットし、地域社会や住民とともに制作や活動を実施し、より良い社会モデルの提示や構築を目指す日本国内で実施されるソーシャリー・エンゲイジド・アートプロジェクトがより活発化していくことを願います。



## ニューセレモニー — 団地から考える生と死 — | 石毛健太+楊いくみ

『ニューセレモニー — 団地から考える生と死—』は、千葉県松戸市の常盤平団地を舞台に、住民と共に現代の冠婚葬祭のあり方を再考・実践を目指すプロジェクトです。高齢化・過疎化・多国籍化が進み、孤独死や断絶といった問題が顕在化する団地において、主に「死ぬこと」をテーマに議論やシミュレーションを通じて新しいセレモニーの形を探ります。団地建設当初の「憧れの住居」としての姿から一転した現在の課題を踏まえ、住民間の対話を促進し、個人や地域の「生」と「死」をどう捉え直せるかを考える本プロジェクトは、地域活性化と共に、社会全体での未来的課題解決の一助を目指します。

石毛健太+楊いくみ:

石毛健太は、品川・八潮団地での展覧会「変容する周辺 近郊、団地」(2018年)を企画し、団地という周辺から見る都市の姿や社会構造、公共空間や工業文化に関する研究・制作を継続的に行うアーティスト。楊いくみは、様々な作家のパフォーマンスの監修や自身のパフォーマンスプロジェクトに加え、近年は流通経済大学にて学生らと千葉・常盤平団地でフィールドワークを開始し、住民や自治体と連携しながら地域活性化イベントやアート展覧会を企画。

楊いくみ: <https://ikumiyang.com/>

石毛健太: <https://docs.google.com/document/d/e/2PACX-1vRAsbl9zuD7HuRIAVbwpRbn6AupRwSy42MHFEuXXLLcGz0IkV8FyM987yT8YHIEDHEcOoVe2F8u9hhp/pub>



## 変種編集室 | 変種編集室

テクノロジーに対する拒否反応や危機感はどこからくるのかを探ります。変種編集室は、人類がこれまで農業や産業、あるいは文化的な活動の中で、人の手により生物の形態を変化させてきた歴史に注目し、それらを“変種”と称して調査活動を行い、テクノロジーによる新たな生き物との関わりを、技術的・倫理的側面から考えていきます。「遺伝子」を操作することへの嫌悪感と向き合うワークショップやアナログゲームの開発を行うことで、生き物の変化や歴史を紹介したり、あるいは未来にどんな“変種”が生まれるかを想像し議論したり、変種編集室は生き物の捉え方について皆さんと考えていきます。

変種編集室:

変種編集室は、2014年に設立された、人の手が増えられた生き物を「変種」と定義し、社会に存在する様々な変種(動物や植物、微生物など)について調べ、過去から現在、未来への人間と生き物についての考え方を編集していくプロジェクトおよび団体名。主な活動は変種アイデアマラソン、専門家へのインタビュー、WSづくり。現在の編集員は、遺伝学の高橋室長、現代芸術家のユミソン、教育学博士の奥本素子。

<http://henshu.org/>



## 刑務所アート展～壁を超える対話とコラボレーションの創出 |

### Prison Arts Connections

「刑務所アート展」は、刑務所で過ごす人たちの芸術表現を集め展示することで、壁の内と外をつなぐ対話を生み出すプロジェクト。過去2回の開催を通して、全国約30箇所の刑務所から250以上の作品が集まり、延べ1000人以上の来場があった。これまでの刑務所アート展では「受刑者」からの作品を展示し、審査員や来場者からの感想などを受刑者へとフィードバックすることがメインであった。しかし、次のプロジェクトでは、刑務官を含む「刑務所とかかわるすべての人」から作品を集めることを目指し、また、刑務所の内と外とのコラボレーションを探る表現を試みる。

Prison Arts Connections:

Prison Arts Connections (PAC) は、2023年12月に発足した非営利団体。刑務所の内と外のあいだをつなぐ、さまざまな対話と回復、創造の契機を生み出し続けることを目的として、主に「刑務所アート展」を企画・運営する。司法の場やマスメディアとは異なる仕方、この世界で起こる加害や被害、あるいはその回復について私たちが共に向き合うために、アートが可能にするコミュニケーションとは何かを問いかける。

<https://pac-j.com/>





## 予想もつかない何かと出逢える自由と不安と幸福感 35年前の映像との対話 | ドキュメンタリー・ドリームセンター

このアートプロジェクトは、山形国際ドキュメンタリー映画祭のボランティア集団「YIDFFネットワーク」の初期活動を記録した未発表映像をデジタル化し上映するワークショップを通して、35年後の今を考える試みです。映画祭創設時の若者ボランティアの姿を振り返り、現在の地方都市において地域コミュニティ、先端的な芸術文化の発信、国際交流の機会がどのような可能性を提示するのか、再考するワークショップを実施します。その成果をまとめ、2025年の映画祭などで発表。少子高齢化や人口流出の課題を抱える現代の地方都市において、世代を超えた文化活動の継承と地域活性化への道筋を探る、未来志向のプロジェクトです。

### ドキュメンタリー・ドリームセンター：

世界のドキュメンタリー映画の上映・制作支援・普及、映画制作者の養成を目的に、2008年東京で設立された非営利団体。2009～2011年 日本とアジアの映像制作者の交流事業を山形・中国・タイで開催。2012～2023年 日本の映像制作者のワークショップやセミナーを数多く企画。2018～2025年 山形県で地域振興と制作者育成のためのレジデンシー「山形ドキュメンタリー道場」を継続主催し、多くの作品を送り出している。アジアのドキュメンタリー映画の上映・配給も行なう。



## 102年前の声を共に聴く：松戸朝鮮人虐殺の記憶とこれからの未来 | 特定非営利活動法BARD

千葉県松戸市で発生した朝鮮人虐殺の実態を記述・表現することで、地域社会における記憶の継承を促進することを目的としています。アーカイブ調査やオーラルヒストリーといった歴史学的手法で収集・分析した知見を、芸術的手法を用いたワークショップ等を通じて市民と共有し、過去と現在をつなぐ対話の場を創出します。本取り組みは、地域住民が痛ましい歴史の一部を体感的に学び、未来へ向けた共通のビジョンを育むことも企図しています。

### 特定非営利活動法BARD：

特定非営利活動法人BARDは、学際的なアプローチを援用した芸術実践のためのコレクティブです。境界線を引き直すように他分野との協働やジャンルの横断によりあらたな可能性を拓き、社会を指向する芸術を拡張していくための集合体を模索しています。国内外の展覧会のアート・ディレクションやシンポジウム、ワークショップ等を企画・実施しています。



## ホームレス状態の方とその支援・ケアについての協働、対話プロジェクト | 友清ちさと

長年ホームレス状態の当事者支援を行う抱樸館北九州と東八幡キリスト教会に絵描きとして通い、元当事者や支援者や活動や生活をスケッチや対話から生まれた革新的なスタンドグラスを協働創作するプロジェクト。八幡製鉄所や炭鉱所が与えた人々の暮らしへの影響、キリスト教信者の活動が土地に与えてきた影響を聞き取りとミーティングを通じ調査、この地域で多様な支援団体が形成された背景を紐解く。調査内容を皆で一枚の下絵にまとめながら、スタンドグラス制作の下絵にあたるスタンドグラス風のガラス絵の創作をする。権力の象徴にもなり得てきたスタンドグラスを、当事者・元当事者・支援の様子をあらわした価値の逆転・力の転換など生きる糧のシンボルになるようなものに転換し創作することを目的にしながら、協働創作の軌跡を辿る。

### 友清ちさと：

アーティスト。福岡県在住。当事者性と関わりプロセスを立ち上げる。2019年-2023年ドイツ滞在。精神医療総合医療施設Alexianer内アール・ブリュット、アートセラピーの美術館Kunsthau Kannenでインターン、作家Wilke Kleesと共同制作。同時期に母屋やライフラインを自分たちで整えるワゴンコミュニティにて制作。帰国後九州の柑橘の皮でのアロマづくりを通じ訪問看護ステーションと関わる。近年の展覧会に2024福岡県主催 旧上庄小レジデンス 2023成果展「来し方、行く末」（九州芸文館）。







## Queer Art Event「貝殻をあつめる、道路に線をのこす」

### Moche Le Cendrillon

Moche Le Cendrillon、岩瀬海、Misaki Okubo、山もといとみの4名により、「クィアな表現の場」をテーマに、とくにクィアコミュニティの中でも抑圧的な状況に置かれるFLINTAが主体となるクィア・アート・イベントを京都で開催する。イベントに先立ち、これまで行われてきたクィアアートの表現の場や展覧会についてリサーチ・分析し、レズビアンやトランスジェンダー、Aro/Aceの文化芸術やコレクティブ、アクティビズムなどのコミュニティを当事者として歩いてきた企画者らの実践に関連づける。それらをもとに、どのようなクィアの展覧会企画、運営が可能かを参加者と共に考え、話すイベントを企画・実施する。



#### Moche Le Cendrillon (押谷藍花) :

現代美術作家/ドラグ・パフォーマー。東京藝術大学大学院先端芸術表現専攻在籍。個人的な物語を起点に、社会にあるジェンダーやセクシュアリティ、美醜のステレオタイプを解体するためのセルフ・ポートレートの作品を制作。ドラグ・パフォーマーとして、東京を中心にイベント等に出演。セーファー・スペースとしての展覧会を考えるアーティスト・コレクティブ「ケルベロス・セオリー」のメンバー。

<https://mocheleceendrillon.com/>

[https://www.instagram.com/queer\\_shell\\_road/?utm\\_source=ig\\_web\\_button\\_share\\_sheet](https://www.instagram.com/queer_shell_road/?utm_source=ig_web_button_share_sheet)



## art for all 社会連携プロジェクト | art for all

art for allは、コロナ禍を契機に美術業界の労働環境改善を目的に活動を開始し、「アーティストのための報酬ガイドライン」の策定に向けた調査を進めてきた。しかし、日本政府はユネスコの「芸術家の地位に関する勧告」を批准しているものの、社会的認知や法整備は不十分である。近年、ユネスコでは「フェアカルチャーチャーター」による芸術家の持続可能な活動支援が推奨されており、日本でもその推進が求められる。本プロジェクトでは、対面イベントを3回開催し、「報酬ガイドライン」の雛形を公開するとともに、アーティスト、美術館関係者、文化行政機関など多様な関係者との連携を深める。これにより、芸術家の社会的地位向上と報酬の適正化に向けた機運を醸成することを目的としている。



#### art for all :

主に美術分野の関係者からなるプラットフォームとして、2020年のコロナ禍を機に活動を開始した。「美術に関わる個人のエンパワメントの推進」「アート・ワーカーの活動環境の改善」「文化芸術が尊重される社会の実現への寄与」を目的に、美術分野におけるプラットフォームの構築と、活力ある労働環境の整備を目指してきた。「アーティストのための実践講座」などの情報発信を行うとともに、文化芸術に関連する社会課題に取り組むための社会連携にも取り組んでいる。



## Knots for the Artsワークショップ in サンタナ学園 | Knots for the Arts

Knots for the Artsは、滋賀県愛荘町にある在日ブラジル人の子どもたちが通うサンタナ学園を会場としたアートフェスティバルを開催します。本プロジェクトはアートを通じて、異なる文化的背景をもつ人々が出会い、「あなたと私」として向き合い、長期的な関係性を築くことで互いを理解し合う地域社会づくりを目的としています。プロジェクトの一環として、アートフェスティバル準備のためのワークショップを同学園で行います。ワークショップではKnots for the Artsやゲスト講師とともに、子どもたちがポートレート撮影の技術を習得する「写真撮影ワークショップ」や、美術館を訪問し鑑賞のポイントや展示について学ぶ「キュレーション・ワークショップ」を実施予定。



#### Knots for the Arts :

「Knots for the Arts」は、アーティスト・金仁淑、ギャラリスト・杉田モモ、キュレーター・西田祥子からなるコレクティブであり、アートと社会を結ぶコミュニケーションを促進させ、多様な人々に開かれる芸術・文化のプラットフォームづくりの活動を行っている。社会とアートをつなぐ人々のインタビュー動画公開「リサーチプロジェクト」や様々な地域で活動するアーティストの作品上映と対話によるプロジェクト「Screening Dialogue in Asia」等を企画・実施。



## Traveling Tea House プロジェクト | あべさやか

2022年より茨城県、袋田精神科病院で利用者、医療従事者の方と協働アートプロジェクトを行っている。制作過程の中で、五感で感じる体験を共有することでみえてくる共同体と、一人ひとりの声を院外へ届けることを目指している。今回は日本の精神科病院の状況と関係者の素顔を映し出す作品を病院に現存する1977年に建てられた保護室を軸に関係者への聞き取りとドローイングを通して制作したい。また、精神科病院で見聞きした院外からは見えにくい現実を伝えて、様々な考えを共有するために、利用者、医療従事者、アーティストらで育てた藍で染めた布と蚊帳の中で、同様に院内で制作した藍のお茶を飲む対話型パフォーマンスを継続して行う予定。

### あべさやか：

アーティスト。サンドベルグ大学院卒業、現在徳島県在住。実際に会った人や訪れた場所を、聞き取りやドローイングを通して見えてくる人柄や声、社会背景を様々な形のポートレートへ落とし込んだものを作品とする。観ている人へ自分自身を振り返るきっかけにてもらおうべく、五感を刺激するインスタレーションや等身大のドローイングの形式で制作発表する。精神科病院アーティストインレジデンスFifthSeason等へも参加。



## ソーシャリー・エンゲイジド・アート 長期支援助成について

当財団では、多くのソーシャリー・エンゲイジド・アートプロジェクトは単年ではなく、長期間にわたって行われるケースが大半です。その活動の特性を鑑みて、「ソーシャリー・エンゲイジド・アート長期支援助成」が2023年度より立ち上がりました。

「ソーシャリー・エンゲイジド・アート長期支援助成」は、国内で実施されている質の高いソーシャリー・エンゲイジド・アートプロジェクトに対して顕彰(けんしょう)し、複数年にわたって支援することを目的としております。

助成プロジェクトの選考に当たっては、すでにその活動が一定の評価を得ており、ソーシャリー・エンゲイジド・アートへの理解を促し、ソーシャリー・エンゲイジド・アートの新たな可能性を示すプロジェクトであることとして、助成対象プロジェクトを決定いたしました。

支援内容：年間50万～100万円

助成期間：最大10年間

### 第一回ソーシャリー・エンゲイジド・アート長期支援助成

支援対象団体：Don't Follow the Wind(ドンド・フォロウ・ザ・ウィンド)

支援開始：2023年

支援期間：3年目(継続)

## 一般財団法人川村文化芸術振興財団 ソーシャリー・エンゲイジド・アート支援助成について

一般財団法人川村文化芸術振興財団は、文化芸術により人々の創造性や表現力を育み、よりよき社会の構築を目指すために2017年2月15日に設立されました。当財団は優れた能力を有する芸術家に対し活動を支援し、これまで培われてきた文化芸術を継承、発展させ、独創性のある革新的な文化芸術の創造を促進することを目指します。本助成事業はコミュニティや社会にコミットし、地域社会や住民とともに制作や活動を実施し、より良い社会モデルの提示や構築を目指す国内のソーシャリー・エンゲイジド・アートのプロジェクトに対して、毎年採択しています。助成対象は門戸を広げて年齢・国籍不問とし、海外からの応募も積極的に受け付けています。

### ◎審査員

工藤安代(NPO法人ART&SOCIETY研究センター 代表理事)

清水知子(東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科准教授)

藤井光(アーティスト)

藪前知子(東京都現代美術館学芸員)

### ◎2025年度助成贈呈式を開催

助成団体10件のご紹介、および採択プロジェクトのプレゼンテーション、審査員による所感・コメントも発表されました。

日 程：2025年3月29日(土) 15:30-17:00

場 所：YUWAERU(結わえる)本店 東京都台東区蔵前2-14-14

参加者：助成受賞団体(オンライン参加含む)、審査員

当財団理事長及び理事

## 本事業および取材・掲載のお問い合わせ

一般財団法人川村文化芸術振興財団 ソーシャリー・エンゲイジド・アート支援助成 東京都千代田区外神田2-15-2

公式ウェブサイト <http://www.kacf.jp/> E-mail: [info@kacf.jp](mailto:info@kacf.jp)